

徒然草(一)

よしだけんこう  
吉田兼好

つれづれ草 上

序段

つれづれなるままに、日ぐらしすずりにむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

第一段

いでや、この世にうまれては、願はしかるべきことこそ多かめれ。

みかどの御位は、いともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり、ただ人も、舍人など賜はるきはは、ゆしと見ゆ。その子うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、程につけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちおし。

法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木のはしのやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢ひ猛にののしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、仏の御おしへにたがふらむとぞおぼゆる。ひたぶるの世捨て人は、なかなかあらまほしきかたもありなむ。

人は、かたちありさまのすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず。愛敬ありて、ことば多からぬこそ、あかずむかはまほ

しけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるる本性見えむこそ口をしかるめけれ。

品かたちこそ生まれつきたらめ、心はなか賢きより賢きにも移さば移らざらむ。かたち心ぎまよき人も、才なくなりぬれば、品くんだり、顔にくさげなる人も立ちまじりて、かけずけおさるこそ、ほいなきわざなれ。

ありがたきことは、まことしき文の道、作文・和歌・管弦の道、また有職に公事の方、人の鏡ならむこそいみじかるべけれ。手などつたなからず走り書き、声をかしくて拍子とり、いたましようするものから、下戸ならぬこそ、をのこはよけれ。

### 第七段

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからむ。世は、定めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべをまち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。あかず惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心ちこそせめ。すみはてぬ世に、みにくきすがたを待ちえて何かはせむ。命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬ程にて死なむこそめやすかるべけれ。

その程過ぎぬれば、かたちをはづる心もなく、人に出でまじらはむことを思ひ、夕ゆふへの陽ひに子孫を愛してさかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深く、ものあはれもしらずなりゆくなむあさましき。

#### 第八段

世の人の心まどはすこと、色欲しきよくにはしかず。人の心はおろかなるものかな。にほひなどはかりのものなるに、しばらく衣装いしやうに薰物たきものすと知りながら、えならぬにほひには、必ず心ときめきするものなり。久米くめの仙人せんじんの、物洗ふ女の脛はざの白きをみて通つうを失うしなひけむは、誠まことに手足はだへなどのきよらかに肥こえあぶらづきたらむは、外ほかの色ならねば、さもあらむかし。

#### 第九段

女は髪かみのめでたらむこそ、人の目たつべかめれ。ひとのほど、心ばへなどは、ものいひたるけはいにこそ、物越ものこしにも知らるれ。ことにふれて、うちあるさまにも人の心をまどはし、すべて女の、うちとけたるいも寝ず、身ををしとも思ひたらず、たふべくもあらぬわざにもよくたへしのぶは、ただ色を思ふがゆゑなり。

まことに愛著あいぢやくの道、その根深く源遠みなもとし。六塵ろくぢんの樂欲多しといへども、皆厭離えんりしつべし。その中に、ただかのまどひの一つやめ難きのみぞ、老いたるも若きも、智ちあるも愚おろかなるも、かはる所なしと見ゆる。

されば、女の髪すぢをよれる綱つなには、大象もよくつながれ、女のはけるあしだにて作れる笛ふえには、秋の鹿しか必ず寄よるとぞいひつたへ侍る。みづから戒いましめて、おそるべくつつしむべきはこのまどひなり。

## 第十段

家居いへみの、つきづきしくあらまほしきこそ、かりの宿やどりとは思へど、興きようあるものなれ。

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。いまめかしくきららかならねど、木こだち物ふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀すのこ子、透垣すいがいのたよりをかしく、うちある調度てうども昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの心をつくしてみがきたて、唐からの、大和やまとの、めづらしくえならぬ調度てうどどもならべおき、前栽せんざいの草木まで心のままならず作りなせるは、見る眼も苦しく、いとわびし。さてもやは、ながらへ住むべき。また時のまの烟けぶりともなりなむとぞ、うち見るより思はるる。大方は家居いへみにこそ、ことさまはおしはからるれ。

後徳大寺大臣ごとくだいじのおととの、寝殿しんでんに鳶とびいさせじとて、繩なわをはられたりけるを、西行さいぎようが見て、「鳶とびのみたらむは、何かは苦しかるべき。この殿みの御心みこころ、さばかりにこそ」とて、

そののちは参らざりけると聞き侍るに、綾小路宮あやのこうぢのみやのおはします小坂こさかどのの棟むねに、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひいでられ侍りしに、「誠まことや、鳥からすのむれみて池のかへるをとりければ、御覧ごらんじ悲しませ給ひてなむ」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけむ。